

「気」の慣用表現に関する研究（Ⅰ）

— 定義と分類をめぐる —

戸 田 利 彦

1. はじめに

「気」という語は、日本語において多様かつ数多くの表現を形成し、また、それらなくしては我々日本人の微妙な心理を十分に記述し得ない重要な言葉である。特に、この語は、日常生活の中で慣用表現の構成要素として使用されることが多く、「気」の慣用表現は、主に人間の精神的作用を示す表現として我々の身近な言語生活に根付いていると言えよう。

そこで、本稿では、「気」の慣用表現の定義と範囲指定を行った上で、全268例の慣用表現を29の分類項目に分け、その結果を報告することを目的とする。

2. 「気」の慣用表現の定義と分類

2. 1 「気」の慣用表現とは

「気」の慣用表現を、今仮に、“「気」という言葉をその構成要素として持つ慣用表現”と定義することにする。また「慣用表現」の意味するところを“元来二つ以上の単語からなる一連の言葉”とするならば、それは多様な表現形態をとることになる。例えば、‘気が付く’‘気が気でない’‘気が長い’‘気のせい’‘嫌気が差す’‘やる気になる’‘その気がある’‘水気を切る’などは基本的に「気」の慣用表現と言ってよいことになり、場合によっては、‘意気投合’‘元氣潑刺’‘才氣煥発’などのいわゆる四字熟語も含みうるかもしれない。従って、これらの表現を「気」の慣用表現として認定するか否かを判断する際、少なくとも以下の点について考慮する必要がある。

- ①「キ」「ギ」「ケ」「ゲ」の読み方の扱い
 - ②複合語の一部としての「気」をどう扱うか
 - ③複合語の一部としての「気」の場合、前項（語頭）にあるものと後項（語頭以外）にあるものをどう扱うか
 - ④構成要素としての「気」が“精神的作用以外”を示すものをどう扱うか
 - ⑤単純語の「気」を用いた表現の慣用表現としての認定基準
 - ⑥複合語の「気」を用いた表現の慣用表現としての認定基準
- まず、①に関しては一般に「気」という漢字表記をとるものはすべて扱うのが妥当

であると考え。その際、「気転」と「機転」のように両者に意味上の連関があるものの、「奮起」に対する「奮気」のような連想による明らかな誤用、「昔堅気」に対する「昔気質」のような慣用的な表記を持つものなど、個々にその背景を吟味した上で適宜取捨選択することになる。

②及び③については、①と同様に処理することが可能である。「気」という漢字表記をとるものはいかなる複合語であっても取り上げることとする。従って、「気苦労」「気色ばむ」「意気盛ん」「大人気無い」などすべて扱うことになる。

④は、「気温」「気象」「気配」「鬼気」「空気」「景気」「殺気」「天気」「雰囲気」などの語を構成要素にもつ表現を扱うか否かという問題である。「気」は人間の生命、精神、心の動きについていう言葉であると共に、変化、流動する自然現象やそれを起こす本体を表わす言葉である。「鬼気」「殺気」「雰囲気」などの何となく辺りに漂っている様子を示す語も後者に属する。自然の「気」と人間の精神的作用を示す「気」は本来関係があるという立場からは、“精神的作用以外”の「気」を構成要素に持つ表現も扱うべきである。

⑤に関しては、網羅的に取り上げる立場をとる。いわゆる「慣用句」に関しては何らかの認定基準を立て、それに従ってその範囲を確定する必要があり、またある程度確定し得るが、単純語の「気」の慣用表現については、元来「気」という言葉が、慣用表現の中ではなく独立した語として使用されることが極めて稀なことを考慮するならば、一部の例外を除いて、基本的にすべての表現を取り上げるのが妥当と考えるからである。

一方⑥に関しては、一定の基準を設定し、「慣用表現」の範囲を確定していく必要が生じる。その際、認定基準の一つとして用法上の制約を用い、「典型慣用句」あるいは「慣用句」などを設定していくことが有効である。¹⁾

以上の方針に基づき、「気」の慣用表現を収集することとする。

2. 2 「気」の慣用表現の分類

2. 2. 1 「気」の慣用表現の分類法

「気」の慣用表現の分類にはいくつかの方法がある。まず第一に、単純語としての「気」と複合語の一部としての「気」のいずれを構成要素として持つ慣用表現なのかといういわゆる形態による分類である。この分類法による場合、後者はさらに複合語の前項（語頭）に「気」を持つものと後項（語頭以外）に持つものの二つに分けることが可能である。第二に、意味による分類がある。前述のように、「気」の語義は、「気が置けない」「呆気にとられる」の中の「気」のように‘精神的作用’を示す場合と、「気候」「天気」の中の「気」のように‘精神的作用以外のもの’いわば‘物質的なもの’を示す場合に大別できる。前者はさらに‘生命力’‘意識’‘生命力に基づ

く能力’‘生命力の方向性’‘感情’‘対社会的性格’‘先天的性格’などに下位分類できる。第三の分類法として慣用表現の品詞性によるものが考えられる。具体的には、形容詞・形容動詞性、名詞性、動詞性の三種に分けることになる。第四に、慣用表現の構成要素としての助詞による分類が挙げられる。「気」・「気」の複合語＋が～」「気」・「気」の複合語＋に～」「気」・「気」の複合語＋の／は／も～」「気」・「気」の複合語＋を～」などの分類が可能である。

本稿では、以上の四つの分類基準を複合した分類法を用いて、「気」の慣用表現の分類を試みることにする。

2. 2. 2 「気」の慣用表現の分類項目

上述の分類法に従って、以下のような分類項目を設定した。

I. 「単純語」の「気」の慣用表現

- (1) 「気」＋が＋形容詞
- (2) 「気」＋が／も＋形容動詞
- (3) 「気」＋が（固定）＋動詞
- (4) 「気」＋を（固定）＋動詞
- (5) 「気」＋が・を（交替可能）＋動詞
- (6) 「気」＋に（固定）＋動詞
- (7) 「気」＋に・を（交替可能）＋動詞
- (8) 「気」＋の／は＋名詞
- (9) その他

II. 「複合語」の「気」の慣用表現²⁾

X：‘精神的作用’を示す「気」を持つもの

A：複合語の前項（語頭）に「気」を持つもの

- (1) 「気」の複合語＋が＋形容詞
- (2) 「気」の複合語＋が（固定）＋動詞
- (3) 「気」の複合語＋を（固定）＋動詞
- (4) 「気」の複合語＋が・を（交替可能）＋動詞
- (5) 「気」の複合語＋に（固定）＋動詞
- (6) 「気」の複合語＋の＋名詞

B：複合語の後項（語頭以外）に「気」を持つもの

- (1) 「気」の複合語＋が＋形容詞
- (2) 「気」の複合語＋が（固定）＋動詞
- (3) 「気」の複合語＋を（固定）＋動詞
- (4) 「気」の複合語＋が・を（交替可能）＋動詞

- (5) 「気」の複合語+に(固定)+動詞
- (6) 「気」の複合語+に・が(交替可能)+動詞
- (7) 「気」の複合語+に／の+名詞
- (8) その他

Y: '精神的作用以外'を示す「気」を持つもの

A: 複合語の前項(語頭)に「気」を持つもの

- (1) 「気」の複合語+が+形容詞

B: 複合語の後項(語頭以外)に「気」を持つもの

- (1) 「気」の複合語+が(固定)+動詞
- (2) 「気」の複合語+を(固定)+動詞
- (3) 「気」の複合語+が・を(交替可能)+動詞
- (4) 「気」の複合語+に(固定)+動詞
- (5) 「気」の複合語+は+名詞

3. 「気」の慣用表現の分類の結果

以上の項目に基づく分類の結果を、以下にまとめて示した(各項目内は五十音順とする)。

I. 「単純語」の「気」の慣用表現

- (1) 「気」+が+形容詞

気が荒い 気がいい 気が多い 気が大きい 気が重い 気が軽い 気がさく
気が小さい 気が強い 気が無い〔関心・意向〕 気が長い 気が早い 気が細
い 気が短い 気が優しい 気が弱い 気が若い 気が悪い [18]

- (2) 「気」+が／も+形容動詞

気が確かだ 気が変だ 気がむらだ 気が楽だ 気も漫ろだ [5]

- (3) 「気」+が(固定)+動詞

気が合う 気があせる 気がある〔つもり・好意〕 気がいらいらする 気がい
く 気が浮き立つ 気が移る 気が臆する 気が後れる 気が置ける 気が起こ
る 気が勝つ 気がこもる 気が差す 気が沈む 気がしっかりした 気が渡る
気が知れる 気が進む 気が済む 気がする〔直感〕 気がすわる 気がせく
気がたかぶる 気が立つ 気が違う 気が転倒する 気が遠くなる 気が動転す
る 気がとがめる 気が取りのぼす 気が抜ける〔炭酸飲料など〕 気がのぼる
が乗る 気がはずむ 気がはやる 気が引ける 気がふさぐ 気が触れる 気が
減る 気が変になる 気がみなぎる 気が身にせまる 気が弱る [44]

- (4) 「気」+を(固定)+動詞

気を失う〔意識・意欲〕 気を奪われる 気を兼ねる 気を砕く 気を配る 気

をそる 気を損ねる 気を損ずる 気を確かに持つ 気を遣う 気を付け〔号
令〕 気を強く持つ 気を留める 気を取られる 気を取り直す 気を呑む 気
を練る 気を吐く 気を引く 気を持たせる 気を養う 気を許す 気を煩う

[23]

(5) 「気」＋が・を（交替可能）＋動詞

気があらたまる・気をあらためる 気が痛む・気を痛める 気が移る・気を移す
気が落ち着く・気を落ち着ける 気が落ちる・気を落とす 気が変わる・気を変
える 気が利く・気を利かす 気が腐る・気を腐らせる 気が狂う・気を狂わせ
る 気が挫ける・気を挫く 気が静まる・気を静める 気が逸れる・気を逸らす
気が揃う・気を揃える 気が散る・気を散らす 気が尽きる・気を尽くす 気が
付く・気を付ける 気が詰まる・気を詰める 気が通る・気を通す 気がなくな
る・気をなくす 気が抜ける・気を抜く が入る・気を入れる 気が働く・気
を働かせる 気が張り詰める・気を張り詰める 気が張る・気を張る 気が晴れ
る・気を晴らす 気が引き締まる・気を引き締める 気が引き立つ・気を引き立
てる 気が紛れる・気を紛らわす 気が回る・気を回す 気が向く・気に向ける
気が滅入る・気を滅入らせる 気が揉める・気を揉む 気が休まる・気を休める
気が病む・気を病む 気が緩む・気を緩める 気が良くなる・気を良くする
気が楽になる・気を楽にする 気が悪くなる・気を悪くする [38]

(6) 「気」＋に（固定）＋動詞

気に入る 気に懸かる 気に懸ける 気に食わない 気に障る 気に済む 気に
する 気に染む 気になる〔つもり・意識〕 気に召す [10]

(7) 「気」＋に・を（交替可能）＋動詞

気に留める・気を留める 気に病む・気を病む [2]

(8) 「気」＋の／は＋名詞

気のせい（気の毒）³⁾ 気のまま 気の迷い 気の病 気は心 [6]

(9) その他

気が气でない 気で気を病む 気で持つ [3]

II. 複合語の「気」の慣用表現⁴⁾

X: ‘精神的作用’を示す「気」を持つもの

A: 複合語の前項（語頭）に「気」を持つもの

(1) 「気」の複合語＋が＋形容詞

②気位が高い 気苦労が多い 気色が悪い 気立てがいい 気風がいい 気前が
いい [6]

(2) 「気」の複合語+が(固定)+動詞

- ①気骨が折れる 気合いが合う [2]
②気概がある 気苦労が絶えない 気骨がある 気色が悪くなる 気節がある
気乗りがしない [6]

(3)「気」の複合語+を(固定)+動詞

- ①気合いをはかる 気炎をあげる 気色をうかがう 気褻を合わす 気褻をとる
気任せを言う 気味合いをつける 気脈を通じる 気休めを言う [9]
②気概を持つ 気先を折られる 気先を挫く 氣息を吹き返す 気働きをする
気前を見せる [6]

(4) 「気」の複合語+が・を(交替可能)+動詞

- ①気合いがかかる・気合いをかける 氣勢があがる・氣勢をあげる [2]
②気遣いが見える・気遣いを見せる 気転〔機転〕がきく・気転〔機転〕をきか
せる [2]

(5) 「気」の複合語+に(固定)+動詞

- ①気合いにあたる 気合いにかまう [2]
②気概に富む 気概に燃える 気性に富む [3]

(6) 「気」の複合語+の+名詞

- ①気先の勢い [1]

B: 複合語の後項(語頭以外)に「気」を持つもの

(1) 「気」の複合語+が+形容詞

- ②女(っ)気がない 利かん気が強い 娑婆気が多い 血の気が多い 負けん気
が強い 向こう(意)気が強い 斑気が多い 山(っ)気が多い 悪気がない
[9]

(2) 「気」の複合語+が(固定)+動詞

- ①嫌気がさす 士気が落ちる 心気が湧く 血の気が引く [4]
②意気地がない 浮気の虫がうづく 怖じ気がつく 男気がある 女子気がある
女気がある 茶目っ気がある 乗り気がしない 弱気の虫が顔を出す [9]

(3) 「気」の複合語+を(固定)+動詞

- ①語気を荒げる 正気を失う 心気を砕く 心気を焼く 毒気を取られる 毒気
を抜かれる [6]
②鬱気を払う 怖じ気を挫く 怖じ気をふるう 勘気をこらむる 士気を鼓舞す
る 怒気を帯びる 怒気を含む 毒気を含む [8]

(4) 「気」の複合語+が・を(交替可能)+動詞

- ②士気が高まる・士気を高める [1]

- (5) 「気」の複合語+に(固定)+動詞
 ①いい気になる 意気に感じる 狂気に駆られる 血気に進む 血気にはやる
 士気にかかわる その気になる 毒気にあてられる [8]
 ②呆気にとられる 意気に燃える 打ち気にはやる 男気に富む 勘気につれる
 俠気につむ 豪気に構える 寒気におそわれる 乗り気になる [9]
- (6) 「気」の複合語+に・が(交替可能)+動詞
 ②生氣に溢れる・生氣が溢れる [1]
- (7) 「気」の複合語+に／の+名詞
 ①狂気の沙汰 買い気に食い気 血気の勇 正気の沙汰 平気の平左 若気のい
 たり [6]
- (8) その他
 ②味も素っ気もない [1]

Y: '精神的作用以外'を示す「気」を持つもの

A: 複合語の前項(語頭)に「気」を持つもの

- (1) 「気」の複合語+が+形容詞

②気味が悪い [1]

B: 複合語の後項(語頭以外)に「気」を持つもの

- (1) 「気」の複合語+が(固定)+動詞

②熱気がこもる [1]

- (2) 「気」の複合語+を(固定)+動詞

②活気を帯びる 活気を呈する 金気を帯びる 香気を放つ 殺気を帯びる 殺
 気を放つ 産気を催す 湿気を帯びる 邪気を帯びる 邪気を払う 酒気を帯
 びる [11]

- (3) 「気」の複合語+が・を(交替可能)+動詞

②香気が漂う・香気を漂わせる 妖気が漂う・妖気を漂わせる [2]

- (4) 「気」の複合語+に(固定)+動詞

②夜気に当たる 冷気に当たる [2]

- (5) 「気」の複合語+は+名詞

①運気は根気 [1]

4. 結果の考察

4. 1 「単純語」の「気」の慣用表現

「単純語」の「気」の慣用表現(全149例)に関して、分類項目別に数の多いものを順に挙げると、「気」+が(固定)+動詞の44例、「気」+が・を(交替可能)+動詞の38例、「気」+を(固定)+動詞の23例、「気」+が+形容詞の18例、

“気”＋に（固定）＋動詞”の10例、“気”＋の／は＋名詞”の6例、“気”＋が／も＋形容動詞”の5例、“気”＋に・を（交替可能）＋動詞”の2例、“その他”の3例となる。

まず、動詞性の慣用表現が総数119例（“その他”の「気で気を病む」「気で持つ」を含む）と著しく多く、「単純語」の「気」の慣用表現全体の79.9%を占める点の特徴的である。中でも、格助詞の「が」をとるものが、固定しているものと交替可能なものを含めて総数で82例あり、動詞性慣用表現全体の68.8%と約3分の2を占めている点が注目される。さらにその約半数の44例が格助詞「が」に固定しているものつまり動詞部分の自動詞と他動詞の交替が不可能なものとなっている。このことは、「気」という語が人間の意志を超えた無意志的な存在の概念を表していることを示していると言えよう。一方で、格助詞の「を」をとるものが、固定しているものと交替可能なものを含めて総数で63例ある。そのうちの約3分の1の23例が格助詞「を」に固定しているものである。特に、「気を奪われる」と「気を取られる」は受け身形に、「気を持たせる」は使役形にそれぞれ固定している。また、格助詞「に」をとるものは、固定しているものと交替可能なものを含めて総数で12例ある。このうち「気に懸かる」と「気に懸ける」、「気になる」と「気にする」は自動詞と他動詞との対になっている。「気に食わない」のみが否定形で固定している点は特徴的である。

形容詞性及び形容動詞性の慣用表現は総数24例（“その他”の「気が気でない」を含む）で、「単純語」の「気」の慣用表現全体の16.1%となっている。「気も漫ろだ」以外はすべて格助詞「が」で固定している。このうち形容詞性慣用表現の10例は、「気が荒い・気が優しい」「気が大きい・気が小さい」「気が重い・気が軽い」「気が強い・気が弱い」「気が長い・気が短い」のように反意表現の対を形成している。また、「気が無い」の反意表現はその性質上必然的に動詞性慣用表現の「気がある」となり、対となる表現を持っている。「気がいい」と「気が悪い」は表現形式上では対になっているが、意味的には対になっていない点には注意が必要である。前者が個人の気質・性格・統合的人格を示しているのに対して、後者は個人の感情（情動・心情・気分）の変化を示している。一般に、慣用表現はその構成語を形式的に置き換えて新たな反意表現や類意表現を作り出すことは難しいが、形容詞性の慣用表現は性質上それが比較的容易にできる。「単純語」の「気」の形容詞性慣用表現も特に反意表現に関してその一般的傾向に沿う結果が見られる。その点、統語的制約及び転義度大きい「気が気でない」は特異な存在である。

名詞性の慣用表現は総数6例で、「単純語」の「気」の慣用表現全体の4.0%にすぎない。ことわざの認定基準の一つとして、“風刺・教訓・興味などの人間の価値観が比較的短い形の文句で表現されたもの”という包括的な定義を用いるならば、「気は心」は慣用表現の中でも特にことわざとしても認定し得るものである。なぜなら、そ

の意味するところは“たとえささいなことであっても、それはその行為をする人の真心の一端を示すものであるからそうすべきである”という価値観を表現しているからである。「気は心」は、意味的な面だけではなく統語的制約及び転義度の大きさから慣用表現らしい慣用表現になっている。一方、「気のせい」「気のまま」「気の迷い」「気の病」は構成要素の「気」の部分と比較的容易に他の名詞に置き換えることが可能である。転義度も小さく慣用表現らしくない慣用表現と言えよう。「(気の毒)」は一語の複合語としても認定し得る点では慣用表現らしくなく、構成要素の「気」、「毒」の語義を格助詞の「の」を介して結んでも意味の類推が容易ではなく転義度が比較的大きい点では慣用表現らしい。その意味で「(気の毒)」は「単純語」の「気」の名詞性慣用表現の中で中間的な位置にあると考えられる。

4. 2 「複合語」の「気」の慣用表現

4. 2. 1 ‘精神的作用’を示す「気」を持つもの

複合語の前項(語頭)に「気」を持つもの(全39例)に関して、分類項目別に数の多いものを順に挙げると、「気」の複合語+を(固定)+動詞”の15例、「気」の複合語+が(固定)+動詞”の8例、「気」の複合語+が+形容詞”の6例、「気」の複合語+に(固定)+動詞”の5例、「気」の複合語+が・を(交替可能)+動詞”の4例、「気」の複合語+の名詞”の1例となる。

まず、動詞性の慣用表現が総数32例と多く、複合語の前項(語頭)に「気」を持つものの82.1%を占めている点の特徴的である。そのうち、格助詞の「を」をとるものが、固定しているものと交替可能なものを合わせて総数で19例あり、動詞性慣用表現全体の59.4%を占めている。形容詞性の慣用表現は6例であり、全体の15.4%となっている。名詞性の慣用表現は「気先の勢い」の1例のみである。また、慣用表現の種類別の総数は、典型慣用句が16例、慣用句が23例となっている。

複合語の後項(語頭以外)に「気」を持つもの(全62例)に関して、分類項目別に数の多いものを順に挙げると、「気」の複合語+に(固定)+動詞”の17例、「気」の複合語+を(固定)+動詞”の14例、「気」の複合語+が(固定)+動詞”の13例、「気」の複合語+が+形容詞”の9例、「気」の複合語+に/の名詞”の6例、「気」の複合語+が・を(交替可能)+動詞”の1例、「気」の複合語+に・が(交替可能)+動詞”の1例、「その他」の1例となる。

動詞性の慣用表現が総数46例と多く、複合語の後項(語頭以外)に「気」を持つものの74.2%を占めている。そのうち、格助詞の「に」をとるものが、固定しているものと交替可能なものを合わせて総数で18例あり、動詞性慣用表現全体の39.1%を占めている。格助詞の「に」をとる動詞性慣用表現が多いのは、複合語の後項に‘精神的作用’を示す「気」を持つ慣用表現の特徴の一つと言えよう。形容詞性の慣用表現は10

例(“その他”の「味も素っ気もない」を含む)であり、全体の16.1%となっている。構成要素の形容詞が「多い」「強い」「ない」の3種に限定されている点が特徴的である。これらの形容詞性の慣用表現の構成要素としての複合語が、‘生命力’‘感情’‘対社会的性格(ペルソナ)’‘先天的性格’などを示す「気」をその構成要素として持っていることが理由として挙げられよう。名詞性の慣用表現は6例であり、そのうち5例が格助詞の「の」を、1例が格助詞の「に」をとる。特に後者の「買い気に食い気」は統語的制約及び転義度が大きく、格助詞の「に」をとる慣用表現らしい名詞性慣用表現となっている。また、慣用表現の種類別の総数は、典型慣用句が24例、慣用句が38例となっている。

以上の結果を以下‘精神的作用’を示す「気」を持つもの(全101例)としてまとめておく。分類項目別に数の多いものを順にあげると、「気」の複合語+を(固定)+動詞」の29例、「気」の複合語+に(固定)+動詞」の22例、「気」の複合語+が(固定)+動詞」の21例、「気」の複合語+が+形容詞」の15例、「気」の複合語+の+名詞」の6例、「気」の複合語+が・を(交替可能)+動詞」の5例、「気」の複合語+に・が(交替可能)+動詞」の1例、「気」の複合語+に+名詞」の1例、「その他(「味も素っ気もない」)」の1例となる。

動詞性慣用表現が総数78例と多く、‘精神的作用’を示す「気」を持つものの77.2%を占めている。そのうち、格助詞の「を」をとるもの、「が」をとるもの、「に」をとるものが、固定しているものと交替可能なものを合せてそれぞれ34例、27例、23例ある。それらはそれぞれ動詞性慣用表現全体の43.6%、34.6%、29.5%を占めている。形容詞性の慣用表現は16例(“その他”の「味も素っ気もない」を含む)であり、全体の15.8%となっている。また、名詞性の慣用表現は7例であり、1例(「買い気に食い気」)を除いてはすべて格助詞の「の」をとるものである。

4. 2. 2 ‘精神的作用以外’を示す「気」を持つもの

複合語の前項(語頭)に「気」を持つものは、「気」の複合語+が+形容詞」の「気味が悪い」の1例のみである。慣用表現の種類は慣用句である。

複合語の後項(語頭以外)に「気」を持つもの(全17例)に関して、分類項目別に数の多いものを順に挙げると、「気」の複合語+を(固定)+動詞」の11例、「気」の複合語+が・を(交替可能)+動詞」の2例、「気」の複合語+に(固定)+動詞」の2例、「気」の複合語+が(固定)+動詞」の1例、「気」の複合語+は+名詞」の1例となる。動詞性の慣用表現が16例で、複合語の後項(語頭以外)に「気」を持つものの94.1%を占めている。そのうち、格助詞の「を」をとるもの、「が」をとるもの、「に」をとるものが、固定しているものと交替可能なものを合せてそれぞれ13例、3例、2例ある。それらはそれぞれ動詞性慣用表現全体の81.3%、18.8%、12.5%を

占めている。名詞性の慣用表現は「運気は根気」の1例が見られる。前述の「気は心」と同様に、「運気は根気」は慣用表現の中でも特にことわざとしても認定し得るものである。「運気というものは根気強くことにあたれば必ずいつか上向いてくるものであるから諦めないでこつこつと努力を続けることが肝要である」という意味を持ち価値観を示しているからである。また、統語的制約及び転義度も比較的大きく、慣用表現らしい慣用表現になっている。慣用表現の種類別の総数は、典型慣用句が1例、慣用句が16例となっている。

以上の結果を以下‘精神的作用以外’を示す「気」を持つもの(全18例)としてまとめておく。

分類項目別に数の多いものを順に挙げると、「気」の複合語+を(固定)+動詞」の11例、「気」の複合語+が・を(交替可能)+動詞」の2例、「気」の複合語+に(固定)+動詞」の2例、「気」の複合語+が+形容詞」の1例、「気」の複合語+が(固定)+動詞」の1例、「気」の複合語+は+名詞」の1例となる。

動詞性慣用表現が16例で、‘精神的作用以外’を示す「気」を持つものの88.9%を占めている。そのうち、格助詞の「を」をとるもの、「が」をとるもの、「に」をとるものが、固定しているものと交替可能なものを含めてそれぞれ13例、3例、2例ある。それらはそれぞれ動詞性慣用表現全体の81.3%、18.8%、12.5%を占めている。形容詞性の慣用表現は1例であり、全体の5.6%となっている。また、名詞性の慣用表現は格助詞「は」をとるものが1例あるのみである。

5. おわりに

本稿では「気」の慣用表現として全268例を取り上げたが、「単純語」の「気」の慣用表現の149例は言うまでもなく、「複合語」の「気」の慣用表現の中の‘精神的作用’を示すもの101例も合わせて、総計250例のものが‘精神的作用’を示す「気」を構成要素として持つものであることがわかった。それが全体の93.3%に達するという事実は、「気」の慣用表現が、‘人間の精神’に関わる表現として日本語の中にいかに深くまた広く根付いているかを示している。また、少なくとも29の分類項目の設定が可能ほど多様な表現形式を持つことが判明した。特に、慣用表現の品詞性に着目した場合、動詞性のものが213例、形容詞及び形容動詞性のものが41例、名詞性のものが14例あり、それぞれ「気」の慣用表現全体の79.5%、15.3%、5.2%を占めている。このうち、動詞性慣用表現に関して分類項目別に10例以上の慣用表現を持つものを数の多い順に挙げると、「気」+が(固定)+動詞」の44例、「気」+が・を(交替可能)+動詞」の38例、「気」+を(固定)+動詞」の23例、「気」の複合語(精神的作用・後項)+に(固定)+動詞」の17例、「気」の複合語(精神的作用・前項)+を(固定)+動詞」の15例、「気」の複合語(精神的作用・後項)+を(固定)+動詞」の

14例、「気」の複合語（精神的作用・後項）＋が（固定）＋動詞”の13例、「気」の複合語（精神的作用以外・後項）＋を（固定）＋動詞”の11例、「気」＋に（固定）＋動詞”の10例となる。以上のように、本稿では、「気」の慣用表現の定義に基づく範囲指定をした上で、個々の慣用表現の分類を行い、その結果を考察することに主眼をおいた。範囲指定の仕方あるいは慣用表現の取り上げ方によりまた新たな事実が浮かび上がってくることも予想される。今後の課題としたい。

【注】

- (1) 慣用句の認定基準の一つとして、以下の用法上の制約を用いた。a：連結・共起の制約（1. 連体修飾を受けうるか。2. 連用修飾を受けうるか。3. 句中に連用修飾語を挿入しうるか。4. 連体修飾句になりうるか。） b：置き換えの制約（5. 肯定・否定の表現は可能か。6. 命令表現を取りうるか。7. 直接・間接の受身表現を取りうるか。8. 前項・後項は敬語表現を取りうるか。） c：語順転換の制約（9. 名詞句に転換しうるか。） これら1～9すべてについて用法上の制約（一般に言いにくい、言えない／かなり制約がある）が認められるものを「典型慣用句」、2または4以外のすべてについて用法上の制約が認められるものを「慣用句」とした。
- (2) いわゆる四字熟語は考察対象から外した。
- (3) 「気の毒」は一語とも認定し得るので（ ）内に入れて示した。
- (4) ①は「典型慣用句」、②は「慣用句」であることを示す。